

# 家庭の中での金融リテラシー

経済に強いママを増やす会

川元 由喜子

子どもたちが生きていく力を身に付けるために、どの家庭でもさまざまな教育を与えているでしょう。その中にも、お金についての教育も含まれてしかるべきです。消費する立場からの金銭教育だけではなく、働いて稼ぐ立場からお金とどう付き合うか、という視点も大切です。将来長く働いて生きていく子どもたちがどうやって職業を選ぶのか、そこに親たちはどう関わっていいのかと考えると、必要なのは金融の知識というよりも、経済についての幅広い関心であることに気がきます。多くの家庭で教育の要となる母親たちに、もっと経済の話題に触れる機会や経済について語り合う場がなくてはなりません。それは子どもたちのためだけではなく、経済・社会全体の利益にもなるはずで

## 1 「経済に強いママを増やす会」の発足

### (1) お金を巡る倫理観

「経済に強いママを増やす会」という活動を6年前から主宰しています。子育て中のお母さん方に、経済や金融をテーマに話をし、そして、経済やお金について語り合う場を持つ、という活動です。大変長い名称なので、「経ママ」を通称としています。

この活動を始めるきっかけとなった出来事が2つありました。1つ目は、その頃急増し始めていたオレオレ詐欺の容疑者が連行されるニュース映像を見たことです。そこに映っていたのは、20代後半くらいに見えるごく普通の若者たちでした。取り立てて不良らしくもない、おとなしそうな彼らは、それが自分の息子であってもおかしくないように見えたのです。

オレオレ詐欺を働くには、凶器も暴力もいりません。オフィスで働くように、事務机で電話

をかけながら、やっていることは立派な犯罪なのです。連行された彼らに、それが犯罪であるという十分な認識はあったのでしょうか。軽い気持ちで、気が付いたら犯罪に手を染めていた、そんな感じだったのかもしれませんが、自分の子どもがそんなことになったら…それは恐ろしい想像でした。

「お金についてきちんと子どもに教えなければ」と強く感じたのはそのときです。それまでも、漠然と考えてはいましたが、何よりも大事なものは、お金に関わる倫理だと気付いたのです。消費者としての関わり方だけではなく、働いて稼ぐ立場としてお金とどう付き合っていくのか、そこにはしっかりした倫理観が必要です。それは働き方、職業意識の問題そのものでもあると思います。よほど裕福でない限り、子どもたちは皆、働いて収入を得て生計を立てていくのですから、「生きる力」の一部として、お金をどう稼ぐかについてしっかりと考えた考え方を身に付けさせることは、大切なことです。

普段、子どものためのお金の教育といえば、「お金の使い方を教えること」、具体的には「お小遣い帳のつけ方」、といったことでしょう。それはもちろん大切です。しかし、子どもの成長に合わせてもっといろいろな角度から考えさせることも必要です。お金を稼ぐ行為に一番必要なものは「信用」であること、そのためには「誠実」であらねばならないこと、信用を積み上げるのは大変でも壊すのはたやすいこと、そうしたお金を巡る深い考察も、子どもが育つにつれて教えられるようでありたいと考えました。

## (2) 職業選択とリスク

もう1つのエピソードは、ある大学生の話でした。大学生から就職事情について聞く機会があったのですが、大学生の人気就職先の話になると、大手生損保や銀行が、圧倒的に人気があるというのです。まるで私の学生時代と少しも違わないではありませんか。日本の経済社会の停滞ぶりを見せつけられたようで、驚いたということはないにせよ、少なからずショックを受けました。私が就職した頃はまだ、金融業界にもそれなりに成長期待が寄せられていましたが、今はどうでしょうか。大手金融機関に対する人気は、ほとんど全て、職の安定に対する期待からくるものではないでしょうか。

この現実を耳にして、私は大いに危機感を覚えました。就職氷河期が続き、安定した職に就くのが難しかったことは確かです。しかし、前途洋々たる若者たちが、そろいもそろって安定第一で人生の選択を行うとすれば、それはとても健全なこととは思えません。なぜこうした事態になっているのだろうと考えてみると、そこには家庭教育が大きく影響しているのではないかと思うようになったのです。

日本では、雇用の安定した時代が長く続いてきました。多くの大企業で終身雇用制が維持され、そうした企業に就職することで、職の安定を手に入れることができました。実際、「安定」

は目指すものだったのです。そんな時代をずっと見てきた親たちが、子どもたちの就職にあたって「安定を重視しろ」と勧めるのも、無理はありません。安定した職に就くことが第一だと、事あるごとに聞かされて育った子どもたちが、安定を最優先する態度を身に付けているのもうなずけます。しかし、それでよいのでしょうか。

安定志向ということは、リスクをとらないということです。これから社会に出ていく人々の多くがひたすらリスクを避けようとするのであれば、それは経済にとっては停滞を意味します。それでも個々人が安定しているのだから良いかという、実はそうでもないと思うのです。

子どもたちは、この先何十年も働いていきます。今、安定しているように思えるものが、何十年先も同じように安定していると、どうして分かるのでしょうか。このようにいうと、「でも公務員なら大丈夫でしょう」という話が必ず出ます。しかし、公務員でも解雇される国は、世界にいくらでもあります。将来もしものことがあって、新しい職を探すようなことになっても、と想像してみてください。安定することだけを目標にして働いてきた人材が、雇う側から見て魅力的に見えるのでしょうか。「先が見えない状況にあっても対処してきた」というほうが、有能な人材に見えるはずですよ。

安定というのは、結果的にそうならいれば望ましいのですが、初めから安定を目指すことは、案外危険なことでもあるのです。いってみれば、人生のリスク管理ということかもしれません。最初から完璧な安定を想定して行動すれば、予定していなかった事態が起きた場合に対処できないということにもなります。昔から「手に職」という言い方もありますが、さまざまな事態に対応できる力を身に付けるということが、真の安定を意味するのではないのでしょうか。

子どもが職業を選択するにあたって、親が何らかのアドバイスを与えられるとすれば、それはさまざまな職業の将来性や未来の経済について、子どもとともに考えたり、話し合ったりすることではないでしょうか。また、子どもが十分に考えを深められるように、情報を示すことではないでしょうか。そのように考えると、教育を与える側の親たちに必要なのは、金融の表面的な知識ではなく、経済に対する幅広い関心と基本的な知識であることに気がきます。そして、その経済にお金がどう関わっているのかを教えることが、お金の教育の大切な部分だと思います。

### (3) 母親たちと経済教育

そこで、家庭教育の大きな部分を担っているであろう母親が、経済について学ぼうと考えたとしましょう。さて、彼女はどのようにすればよいのでしょうか。

日本の文化の一部なのかもしれませんが、お金の話は、「はしたない」「教育の場にお金を持ち込んではいけない」という意識が根強くあるせいか、普段、経済やお金について学べる場は、ほとんどありません。あるとしても、開催時間が夜であるなど、勤労者を対象とするものがほとんどです。自治体やPTAなど、さまざまな主体がいろいろなテーマで母親のための学びの場を提供していますが、経済や金融をテーマに据えたものはまず見当たりません。母親同士の集まりでも、経済が話題に上るということは非常に稀ではないかと思います。「良い母親はお金の話などしない」「衣食住には関心があるけれど経済などには興味を持たないものだ」という先入観の存在を感じます。確かに、経済よりは衣食住のほうが、話題としては人気があるでしょう。しかし、学ぼうとしても学ぶ場がないというのは、困ったことです。

困ったことだと言いながら、手をこまぬいても何も起こらないので、口コミでいわゆる

ママ友を集め、自宅で始めたセミナーが「経ママ」でした。それが6年前のことです。以来、細々と続けています。

セミナーを主宰するにあたって参加者に伝えたいことは、「①子どもにお金の話をすることの必要性」「②経済は身近なもの、自分たちの生活そのものだという感覚」「③市場経済の基礎的な考え方、リスクを理解すること」などです。このほか、実際に役立ててほしいという意味で、金融の基礎知識や社会保険の話などの実用的な内容も欠かせないと思っています。

## 2 「経済に強いママを増やす会」で 取り上げてきたテーマ

### (1) 子どもにお金の話をする

それでは実際に、どのようなテーマを取り上げているのか、いくつかご紹介しましょう。まず、会のきっかけとなった「子どもにお金の話をする」ことについてです。このテーマで何よりも伝えたいのは、「子どもにお金の話をしよう」ということそのものです。内容よりもまず、「お金の話を避けて通らないで」というメッセージを伝えます。前述のとおり、お金の話ははしたない、教育的でないという感覚がどうしてもあるので、なかなか教育の場でトピックとして取り上げられにくいのが現状です。この状況を改善するには、家庭教育の当事者たちに、その必要性を理解してもらうことが必要であると考えています。

世の中に対しては、声を大にしてその必要性を訴えていきたいと思いますが、「経ママ」に集う皆さんは、既に高い関心をお持ちです。セミナーの終わりには、参加者同士で自由に話し合う時間を作っているのですが、子どもに対するお金の教育に関しては、いつも活発な情報交換がされる場となっています。

お金について子どもに語るアイデアは、一部「ハッピー・マネー®教室」\*のテキストを参考



にしました〔図表1〕。その中で、「お金とは何か」が最も的確で分かりやすく表現されているのが、「お金は感謝のしるし」というひと言です。お金には、交換の手段であったり、価値や信用の尺度であったりと、いくつかの側面があります。「感謝のしるし」であれば、お金のやり取りが行われるほぼ全ての場面に当てはまり、もちろん身近な生活の場面でも、実際に感じるすることができます。

近所で買い物をするとき、例えば大好きなチョコレートを買ったとき、「チョコレートを買って来てありがとう」という気持ちで買い物をしている訳です。そのチョコレートを売っているスーパーは、チョコレートを製造している工場に、「作ってくれてありがとう」と対価を支払い、チョコレート工場は「原料を運んで来てありがとう」とトラックや船に支払い、トラックや船は、「原料のカカオ豆を収穫してくれてありがとう」とアフリカや南米の農家に支払うのです。この手元のチョコレートに対して払う少しのお金が、「ありがとう」を通じて地球の裏側まで循環するという図は何でもないことのように見えますが、新鮮な驚きでもあります。こうした例によって、子どもでも現代のグ

ローバル経済を、身近に感じることはできるのではないのでしょうか。

「ありがとう」に対してお金を払うことは、消費の場面だけではなく、自分で働いてお金を稼ぐときにも、「何か感謝してもらえるような価値のある仕事をする必要がある」という理解につながります。それは、職業選択の一つの指針にもなるはずですが、また、働き出した後も、自分の得た収入が何に貢献したことの対価なのか、自問自答してみるきっかけになるでしょう。

よくメディアでは、お金持ちを戯画化して下品に描くということが好んで行われます。大人同士の会話でも、「金回りの良い人は、きっと悪いことでもしているんだよ」という言い方をしたりもします。こうしたことは、きっと羨望や嫉妬の混じった感情からくるのでしょうが、それはお金というものの影の部分肥大化して見せています。そのような捉え方をしてしまうと、「お金を稼ぎたいければ、少々危ないことをするのは仕方がないのだ」という発想にもなりかねません。教育という観点からは、気を付けたい考え方です。

「ハッピー・マネー<sup>®</sup>教室」の考え方で、もう一つ面白いと思うのは、お金を「使う」→「貯める」→「投資する」→「寄附する」と発展するに従って、視野が現在からだんだんと遠い未来へ、また自分だけのためから、自分と他人のため、そして他人・社会のためへと、時間も空間も広がっていくという発想です。自分の成長とともに、お金の使い方も成長させることができる訳です。子どもにはまだピンと来ないかもしれませんが、将来にわたって参考になる考え方ではないのでしょうか。

このプログラムは元々、米国から来ているせいか、「寄附」についても多く紙幅を割いてい

〔図表1〕「ビギーちゃんのハッピー・マネー<sup>®</sup>教室」の紙芝居



出所：I-Oウェルス・アドバイザーズ ホームページより

※Money Savvy Pig (日本名:ビギーちゃん) の画像およびその加工物は米国Money Savvy Generation社の知的財産であり、I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社が同社との契約を基に日本における独占使用権と販売権を有しています。「ハッピー・マネー」はI-Oウェルス・アドバイザーズの登録商標です。当社の許可なくして使用を禁じます。I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社 (<http://www.i-owa.com/>)。「ビギーちゃんのハッピー・マネー<sup>®</sup>教室」の紙芝居については、本誌2014年12月号特集3章を参照。

ます。日本では今のところ、寄附行為が経済の一部に組み込まれているという状態とはいえないでしょうが、今後重視されるであろう視点として、子どもとの会話の中に登場してもよいのではないかと思います。

## (2) 金融の基礎知識

金利や為替、債券、株式、投資信託、保険といった金融商品などに対する理解は、生活に直結する知識です。子どもの教育から切り離しても、これは重要な分野です。このトピックに関しては、自治体のセミナーなど、「経済に強いママを増やす会」の範囲を超えています。

知識そのものの前に、生活の中の金融や経済という観点で、まず心に留めておいてほしい基本的なことを押さえます。生活の知恵として表現すれば、「世の中にうまい話はない」ということになります。金融的表現を用いれば、「ハイリスク・ハイリターンの方考え方」といってもよいでしょう。「うまい話」と思えたら、どこでどのようなリスクを負っているのか見極めなくてはなりません。それが分からないうちは、信用してはいけないということなのです。

「リスク」に対する理解は、金融や投資を語る時に鍵となる部分であると思います。しかし、一般の個人に対しては非常に説明の難しいテーマでもあります。いろいろな試みがなされていると思いますが、リスクとは「どうなるか分からないこと」というのが、最も的確に表された表現ではないかと考えています。リスクの解説は本稿の目的ではありませんので詳しくは述べませんが、私自身も、セミナーのたびに知恵を絞っているテーマです。

本題の基礎知識に関しては、金利の計算や金融商品の選び方など、実務的・具体的なことよりも、「金

利や為替がどういう仕組みで動いているのか」「債券や株式とは経済でどのような役割を果たしているのか」「そういった商品を買う行為は、どういう価値を買っているのか」といったようなことの説明に力を入れています。単なる知識で終わるのではなく、経済や市場に対する理解を深めることにつながると考えるからです。

昨年は、フォスター・フォーラム（良質な金融商品を育てる会）から『おとなの金融力ドリル』という問題集形式の資料が出されました〔図表2〕。紹介を受けたので、実際にこれを利用して「金融の基礎知識」をテーマとしたセミナーも何度か開催しています。各金融商品の知識に対する関心は、決して低くはありませんが、セミナー開催時に「資産運用」と銘打つと、ママたちの集まりでは、あまり人気がありません。資産運用というのは、「年をとったら退職金を使ってやるもの」というイメージが強く、自分には関係のないことと思いがちのようです。

## (3) 経済トピックス

経ママの集いで、比較的人気が高いのは、リアルタイムで話題になっている経済問題です。毎回セミナーの終わりにも、経済に関する話題で自由におしゃべりを楽しむのですが、セミ

〔図表2〕 おとなの金融力ドリル（抜粋）

～ 資産形成や商品選択の考え方 ～

### [1] 【商品購入時の心構え】

預金するつもりで金融機関に行くと、初めての金融商品を勧められました。丁寧な商品説明をされましたが、聞いてもよく分かりませんでした。この場合の行動として、適切でないものはどれでしょうか？

- ① よく分からない、という理由で、勧められた商品を断る。
- ② 専門家の言うことなので、よく分からなくても勧められた商品を購入する。
- ③ このお金の将来の使いみちを話し、他に自分に合う商品がないかを聞いてみる。
- ④ その場では即答せず、他の金融機関や知人・家族などに聞いてみる。

### [2] 【リスクとリターン】

投資信託を買おうと思い、金融機関に行ったら「リスク」について説明されました。この場合の「リスク」に関する次の記述のうち、間違っているものはどれでしょうか。

- ① 高い収益が期待できる金融商品を選ぶ際には、高いリスクをとらなくてはならない。
- ② ハイリスクの金融商品を買えば高い収益が得られる。
- ③ お金が必要な時に換金できない度合いをリスクと呼ぶこともある。
- ④ 銀行の普通預金にもリスクがある。

出所：Foster Forumホームページより

ナーのメインテーマとして取り上げることもあります。例えば、4年前には「アベノミクス」、昨年は「マイナス金利」を取り上げました。

一般のニュースに頻繁に登場する話題でも、経済、財政、市場などに関しては、テレビを見ているだけでは十分に理解できないということがあると思います。日頃の会話の話題になりにくかったり、もう少し知りたいと思っても聞くべき相手が周りにいなかったりする状況は、子育て中の母親であればありがちなことです。

「アベノミクス」の解説を例にとると、その頃の状況は、「3本の矢」の1本目が放たれ、それなりの効果が上がっていました。デフレの解消を目的に、日銀は大量の債券を買って金利引き下げを図り、その効果が現れて急激に金利低下や円安、株高が進行していたのです。なぜデフレの解消が重要なのか、金利が下がるとどういふ効果があるのか、日銀が債券を買うと金利が下がるのはなぜか、なぜそこで円安になるのか、株価が上がるのか、それで最終的にデフレが解消できるのか、このような疑問に答える形で解説しました。「アベノミクス」の意味するところが一応分かったといえるには、このくらいの理解は必要でしょう。

経済・財政政策について、多くの人が正しく理解し、評価できるようになることは、社会全体にとって望ましいことです。個々人の努力で理解するのは誰にとっても大変なことです。特に女性の場合は環境が厳しいと考えられます。難しい話を嫌う傾向がないとはいいいませんが、学びたくても学ぶ場がないという状況は、健全ではありません。少なくとも「母親だから、経済なんかに興味はないだろう」という偏見は、早急になくしていただきたいものです。

### 3 最後に

「子どもの教育」という視点から始まった草の根の経済教育活動ですが、経済について一般の理解を深める努力は、もっと多方面で行われてよいと思います。働き続ける女性だけでなく再就職する女性も、将来は経済的に活躍する道が、さらに開けていくと思われれます。そのための準備としてという側面があります。

家計管理の面でいえば、ローン、クレジット、保険を含め、金融商品はますます多様になっています。年金も、今後さらに自己責任による資産形成の度合いが強まっています。そして、これらに関する情報は、溢れているようでいて必要なものが欠けているなど、とても十分とはいえません。

本当は、能動的にセミナーに足を運ぶ人だけではなく、取り立てて経済にも金融にも興味はないという人にも、ある程度の知識を身に付けてもらうことが必要です。特に、資産形成などについていえば、老後の年金を必要としない人はいないのですから、こうした経済・金融教育を「興味のある人」だけのものにしておいてはいけません。実際は関心のない人までを動かすことはできなくても、こうした教育の機会へのアクセスを増やす努力が、公的に必要だろうと思います。「個々人のため」という視点だけではなく、経済に対する一般の人々の理解が深まれば、経済政策の選択もより適切に行われるようになるはずです。「政策は国民のレベルを反映する」、それが民主主義というものでしょう。草の根の活動も、今後さらに広がるべく続けていきたいと思っています。

かわもと ゆきこ 1985年日興証券(現SMBC日興証券)入社、日興インターナショナル(NY)、エクイティートレーディング室などに勤務。1995年からHSBC投信投資顧問。アナリスト、ファンドマネージャーを経て、日本株運用部長。2003年から数年間、子育てに専念。2009～2016年、ありがとう投信ファンドマネージャー。現在はフリー。2010年より「経済に強いママを増やす会」を主宰。少人数のサロンセミナーなどを中心に、草の根の金融教育活動を続けている。